



ふるさとの偉人「察度」
察度の腹心？泰期

察度は民衆から支持を集め、王位に就いたとされていますが、それを支えた腹心も数多くいたに違いありません。その中でも「弟」の泰期は察度の側近として活躍し、1372年には朝貢のため、明(中国)へ渡ります。その後も、泰期は危険な海を何度も越えて大陸へ渡りました。このような泰期の姿を想像すると、すこぶる勇敢で使命感の強い腹心だったのではないかと想像します。

泰期が海を渡ったことについて、首里王府がまとめた沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』巻十五には「ふるげも、のろのふし」に、「初の貿易船をたたえた『おもろ』と「帰還貿易使節歓迎の『おもろ』が残っています。初の貿易船をたたえたおもろ

ふるげも、のろのふし
一、おぎのたちよもいや、
たうあきない、はゑらちへ、
あんじにおもわれれ、
又いぢへき、たちよもいや
帰還貿易使節歓迎のおもろ
ふるげも、のろのふし

お茶を飲みながら、ぎのわんの歴史をのぞいてみませんか？

一、おぎの、たちよもいや
いぢへき、たちよもいや、
かがみ、いろの、
すでみづよ、みおやせ、
又 おぎとけす、うまた
しげちかめ、はわて
又 おぎとけす、あすた
御さけ、もち、はわて

明より帰還し、宝物を持ち帰った泰期を褒め称え、ふるまう様子が伝わってきます。さて、明へは一体何を送ったのでし

よう。歴代の明朝によって編さんされた『明実録』の中の『太祖実録』には「馬」「硫黄」「胡椒」「蘇木」を献上したとの記述が残っています。察度の在位中、数多くの馬が輸出されており、輸送方法もとても気になります。

騒乱の時代に、察度王を支えた泰期は、「兄」である察度が中山王になったことから、晩年は謝名村に戻って家を継ぎ、地域を大いに栄えさせたと伝わっています。屋号・奥間の屋敷にある御神屋には、「天願按司泰期」の位牌が祀られています。

【問い合わせ】

市立博物館 ☎870-9317



▲「屋号・奥間 御神屋の様子」
向かって右手から
「真志喜大神」「真志喜五郎」「奥間大屋」
「天願按司泰期」の位牌が祀られています。



察度の父親のお墓がある!?

去る2021年は察度生誕から700年という節目で「真志喜森川原第一遺跡」を皮切りに、宜野湾市内でこれまでに確認された察度にまつわる文化財について、紹介してきました。今回は、察度の父と言われる「奥間大親」のお墓がある場所について紹介します。

真志喜中学校の裏手に・・・

奥間大親が眠るお墓は、真志喜中学校の裏手にみえる崖面にあると言ひ伝えられています。この崖面には、奥間大親のお墓以外にも古い時期に造られたと考えられるお墓をいくつも確認することができます。教育委員会では、この古いお墓が集まる一帯を「真志喜グスクヌハナ古墓群」という遺跡として認定しています。

どんなお墓があるの？

古墓群には宇地泊・大謝名・真志喜・大山集落の成り立ちに関わる家筋のお墓があるようです。実際に現地を歩いてみると、伝承にあるような家筋のお墓は、古墓群の中でも高い場所にあります。中でも奥間大親のお墓は最も高い位置にあります。ちなみに、文化財調査では、お墓の造り方や中

に納められている厨子甕(骨壺)、文字資料などを調べます。これまでに教育委員会が調査を行ったところ、崖に穴を掘って造るお墓や沖縄でよく目にする亀甲墓などがあることがわかっています。また、お墓の中にあつた厨子甕に書かれた墨書によると今から約300年も前に亡くなった方が葬られていることがわかりました。

まだまだ謎が残る古墓群

「真志喜グスクヌハナ古墓群」にあるほとんどのお墓はまだ詳細な調査を行っておらず、詳しいことはよくわかっていません。いつ頃造られたのか、なぜこの崖をお墓として選んだのかなど、深まる謎が好奇心をかきたてる一因かもしれません。

今回紹介したこの場所は、私有地となりますので所有者の迷惑にならないように心がけてください。また、現在は落石の恐れがあります。近くを通る際、安全には十分にご注意ください。

【お問い合わせ】

文化課 ☎893-4430



▲空から見た古墓群(枠内)